

社 具 路 遺 跡

—第13地点—

民間駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 4

本 庄 市 遺 跡 調 査 会

序

社具路遺跡の所在する本庄市の西富田地区は、古代集落遺跡の集中地帯として知られ、二本松遺跡、西富田遺跡、社具路遺跡などを中核に西富田遺跡群ともいうべき大規模な集落群が形成されています。これらの遺跡は発掘調査の歴史も古く、早くも昭和30年3月には二本松遺跡の第1次発掘調査が実施されています。また、昭和32年12月の西富田遺跡の調査では、東日本の他地域に先がけ、すでに古墳時代の中期において、それまでの炉にかわって竈（かまど）を導入していることが注目されるなど、学史上重要な遺跡群として広く知られています。社具路遺跡も、昭和55年度に、現在の国道462号線の建設にともなう発掘調査が実施されて以来、これまでに10次余にわたる試掘・発掘調査が行われ、古墳時代から平安時代にかけて長期にわたって存続した集落遺跡であることが明らかになっています。また、社具路遺跡では中世墓坑群も検出されており、当時この地を領した児玉党富田氏やその館跡とされる西富田「堀の内」、さらには富田氏の勧請によるとの由緒をもつ西富田金鑽神社などとの関連が注目されるところです。本書に報告する第13地点の調査においても、調査範囲は狭いながらも古墳時代後期を中心とする住居跡が良好な状態で確認され、遺跡の全容解明に向けてまたひとつ新たな知見を得ることができました。

今後は、本書が学術研究をはじめ、生涯学習、学校教育の場に広く活用されるとともに、さらなる埋蔵文化財保護の推進に寄与することを希望する次第です。

最後になりましたが、当遺跡調査会の埋蔵文化財保存事業に格別のご理解を賜り、現地発掘調査から、資料の整理調査、さらには本書の刊行に至るまで多大なご協力を頂戴した渡辺芳治郎様には、ここにあらためて深甚の謝意を表する次第です。また、調査に際してご指導、ご教示を賜りました方々、発掘現場で直接作業の労にあたられた皆様に心から御礼を申し上げます。

平成16年3月

本庄市遺跡調査会

会長 福島 巖

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市大字西富田字金鎖 408 番 1 に所在する社具路遺跡第 13 地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は、本庄市大字西富田 469 番地新井勝雄氏が計画する駐車場建設に伴い、事前の記録保存を目的として本庄市遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査は、社具路遺跡の 212 m²を対象として実施した。
4. 発掘調査期間は以下のとおりである。
自 平成 11 年 8 月 23 日
至 平成 11 年 9 月 3 日
5. 発掘調査担当者は以下のとおりである。
本庄市遺跡調査会 調査員 増田 一裕
6. 整理調査期間は以下のとおりである。
自 平成 11 年 9 月 3 日
至 平成 16 年 3 月 31 日
7. 整理調査担当者は以下のとおりである。
本庄市遺跡調査会 調査員 太田 博之
8. 整理調査は、有限会社毛野考古学研究所に委託した。
9. 本文の執筆は、I を本庄市教育委員会事務局が、遺物観察表の作成を有山径世(有限会社毛野考古学研究所調査部調査研究員)が、その他を和久裕昭(有限会社毛野考古学研究所調査部主任調査研究員)が担当した。
10. 本書の編集は和久が担当した。
11. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他報告書に関係する資料は、本庄市教育委員会において保管している。
12. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重なご助言、ご指導、ご協力を賜りました。ご芳名を記し感謝申し上げます(順不同・敬称略)。
大熊季広 金子彰男 車崎正彦 恋河内昭彦 長 彰生 坂本和俊 杉山晋作 鈴木徳雄
外尾常人 田村 誠 徳山寿樹 島羽政之 長井正欣 中沢良一 長瀧敬康 日高 慎
松澤浩一 丸山 修 矢内 勲
13. 社具路遺跡第 13 地点の調査にかかる本庄市遺跡調査会の組織は、以下のとおりである(平成 15 年度現在)。

会 長	福島 巖	[本庄市教育委員会教育長]
理 事	掛斐 龍一	[本庄市教育委員会事務局長(会長代理)]
同	柴崎起三雄	[本庄市文化財保護審議委員]
同	野村 廣久	[同]
監 事	亀田 能紀	[本庄市行政委員会事務局長]
同	斉藤 貞子	[本 庄 市 会 計 課 長]
幹 事	吉田 敬一	[社 会 教 育 課 長]
同	桜場 幸男	[社会教育課長補佐]
同	吉田 稔	[社会教育課文化財保護係長]
同	太田 博之	[社会教育課文化財保護係主査]
同	我妻 浩子	[社会教育課文化財保護係主査]
同	松本 亮	[社会教育課臨時職員]
同	町田奈緒子	[同]
調 査 員	太田 博之	[社会教育課文化財保護係主査]
同	松本 亮	[社会教育課臨時職員]
同	町田奈緒子	[同]

凡 例

1. 本書所収の各種遺構図における方位針は、座標北を示す。
2. 各遺構断面図に付記した水準数値は、東京湾平均海面(T.P.)に基づく海拔をm単位にて示したものである。
3. 本書掲載の地形図については、各図の隅に出典を明記してある。
4. 本調査における遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真図版中の遺構名称も同一の記号を用いた。

SI…堅穴住居跡 SD…溝状遺構 SK…土坑 P…ピット

5. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。個別の図におけるスケールにも、縮尺を明示してある。

[遺構図]

遺跡全体図…1:200 SI、SK…1:60

[遺物実測図]

銭貨…1:2 その他…1:4

6. 遺構観察表(表9)中、および本文中の遺構に関する事実記載においては、単位としてmを用い、小数点以下第2位までの数値を四捨五入のうえ示している。
7. 遺物観察表中の単位については、法量にcm、重さにgを用いている。[]内の数値は推定値、()内の数値は最大残存値をそれぞれ示す。
8. 本書にて引用、ないし制作にあたって参照した文献については、その主なものを本文末にまとめて記載した。
9. 本書巻末に掲げた報告書抄録では、遺跡の位置表示として、2002(平成14)年4月1日施行の測量法改正で採用された世界測地系(新国家座標)に基づく緯度・経度、および改正以前の日本測地系(旧国家座標)に拠った緯度・経度の両者を併記している。

目 次

序

本庄市遺跡調査会会長 福島 巖

例 言

凡 例

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 地理的・歴史的環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 調査の方法と経過	7
1 調査の方法	7
2 調査の経過	7
IV 調査の成果	8
1 遺跡の概要	8
2 検出された遺構と遺物	8
(1) 住居跡	8
(2) 土 坑	21
(3) その他の遺構	22
V まとめ	23

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図1 埼玉県の地形	2	図12 SI-04	17
図2 遺跡の位置	3	図13 SI-04 出土遺物	17
図3 本庄市内の主な遺跡	4	図14 SI-05	18
図4 遺跡全体図	7	図15 SI-05 出土遺物	19
図5 SI-01	8	図16 SI-06	20
図6 SI-01 出土遺物	9	図17 SI-06 出土遺物	20
図7 SI-02	11	図18 SI-07	21
図8 SI-02 出土遺物(1)	12	図19 SI-07 出土遺物	21
図9 SI-02 出土遺物(2)	13	図20 SK-01~03	22
図10 SI-03	15	図21 SK-01 出土遺物	22
図11 SI-03 出土遺物	16	図22 西富田金鎖地区の遺構分布状況	24

表目次

表1 SI-01 出土遺物観察表	10	表6 SI-06 出土遺物観察表	20
表2 SI-02 出土遺物観察表	14	表7 SI-07 出土遺物観察表	21
表3 SI-03 出土遺物観察表	16	表8 SK-01 出土遺物観察表	22
表4 SI-04 出土遺物観察表	17	表9 その他の遺構観察表	23
表5 SI-05 出土遺物観察表	19		

写真図版目次

写真図版1 遺跡の位置および周辺の地形	写真図版5 SI-02 出土遺物(2)
写真図版2 SI-01・02	写真図版6 SI-02 出土遺物(3)
SI-02 遺物出土状況	SI-03 出土遺物
SI-03・05・06・07	写真図版7 SI-04 出土遺物
写真図版3 SI-03 カマド周辺	SI-05 出土遺物
調査区南西部遺構完掘状況	SI-06 出土遺物
調査区南西部遺構完掘状況(拡大)	SI-07 出土遺物
写真図版4 SI-01 出土遺物	SK-01 出土遺物
SI-02 出土遺物(1)	

I 調査に至る経緯

1999(平成11)年4月、本市大字西富田^{にしとみだ}469番地新井勝雄氏から、本市大字西富田^{にしとみだ}字金嶺^{かなね}408番1の土地、278㎡に駐車場建設の計画があり、これにかかる『埋蔵文化財の所在及び取扱いについて』の照会が、本市教育委員会に提出された。本市教育委員会が埼玉県教育委員会発行の『本市市遺跡分布地図』をもとに、同地の埋蔵文化財包蔵地の有無を調査したところ、当該の事業計画地には、周知の埋蔵文化財包蔵地社具路遺跡(53-093)が存在することが判明した。

社具路遺跡は、1980(昭和55)年度に県道建設に伴い第1次発掘調査が実施されて以来、1997(平成9)年度までに数回の試掘・発掘調査が行われ、それらの成果によって、古墳時代から平安時代にかけての集落跡と中世の墓地からなる複合遺跡としての性格が明らかになっていた。また、遺跡の範囲、遺構分布の状態もほぼ解明され、とくに照会のあった駐車場予定地には、先に本市市遺跡調査会が発掘調査を実施し、多数の住居跡および中世土壌が検出された社具路遺跡第4地点が南東側に隣接し、北東側には古墳時代後期から平安時代にかけての大規模集落である薬師元屋舗遺跡が近接することから、当該地においても濃密な遺構の分布が予測された。

本市教育委員会では、以上のような状況をふまえ、当該事業計画地について、埋蔵文化財の試掘調査を行うこととし、1999年4月13日および14日の2日間で現地調査を実施した。その結果、当該埋蔵文化財包蔵地において、古墳時代後期の住居跡3軒および中世の土坑4基と、完形の埴2点を含む土師器その他の遺物を検出した。

本市教育委員会では、以上の試掘調査の結果に基づいて、『埋蔵文化財の所在および取扱いについて』の回答を事業者あて送付し、1.協議のあった土地については周知の埋蔵文化財包蔵地である社具路遺跡が存在することから現状保存が望ましいこと、2.やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条第1項、同第99条第1項および文化財保護法施行令第5条第2項の規定に基づき埼玉県教育委員会あて埋蔵文化財の届出を提出すること、3.埋蔵文化財発掘の届出を提出の後は埼玉県教育委員会の指示に従い、当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4.本回答後は関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後の協議の結果、他に駐車場建設の適地がなく、新井勝雄氏との間で契約を締結したうえで本市市遺跡調査会が調査主体となり、当該事業予定地のうち試掘調査によって遺構の分布が確認された212㎡について発掘調査を実施し、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査のための手続きは、1999年8月11日付で、事業者から文化財保護法第57条第2項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、本市教育委員会ではこれを受けて、同届出を1999年8月20日付本教社発第134号で埼玉県教育委員会あて進達した。また、同日付本遺会第2号で本市市遺跡調査会から埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、本市教育委員会ではこれを受けて、同日付本教社発第134号で埼玉県教育委員会あて進達した。

現地における発掘調査は、1999年8月23日から同年9月3日までの期間で実施した。

II 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

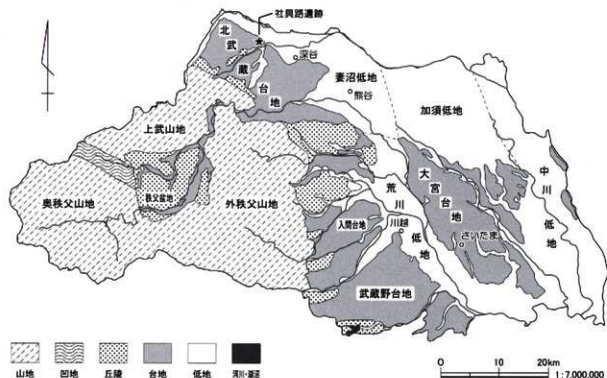
本庄市は、埼玉県西北部に位置する人口約6万1,000人の中核都市である。埼玉県に属しながら、気候、風土、経済、文化などの各側面において、古くから隣接する群馬県西部との関連が深い。近年では拠点法の制定をうけ、2004（平成16）年度の上越新幹線駅開業に前後して各種の開発事業が進められている。

市の北東部では、烏川などに由来する氾濫原（本庄低地）に南接する形で、本庄台地が位置する。本庄台地は、洪積世末期の立川期に神流川の堆積作用によって形成された扇状地性台地である。おおむね砂礫層を主体とするが、粘土層や粘質ローム層などが複雑に堆積しており、地点によってその様相は変化する。扇頂部は児玉郡神川村大字寄島地区にあり、扇端部は本庄市市街地北縁、さらには同市大字東五十子付近を通る。市の中央付近を東流する女堀川の浸食により、本庄低地と接する台地北側では河岸段丘が形成されている。段丘崖の高さは4～12m、崖線は8km前後にわたって東西に連なる。社具路遺跡は、この本庄台地の中心城、女堀川を南に300～500m隔てた箇所に位置する。

2 歴史的環境

現在、本庄市においては、遺物散布地を含めた弥生時代以前、および近世以降の遺跡は少数にとどまる一方、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺跡が多く周知されている。以下、市域における各時代の主要な遺跡、および東五十子赤坂遺跡周辺の概況について記す。

〔旧石器時代〕 明確に遺構と認定しうる事例は、いまだ知られていない。宍勝寺北裏遺跡の調査にてローム層中より剥片が出ているが、これが現在までのところ市内唯一の包含層出土遺物である。他の遺物は、



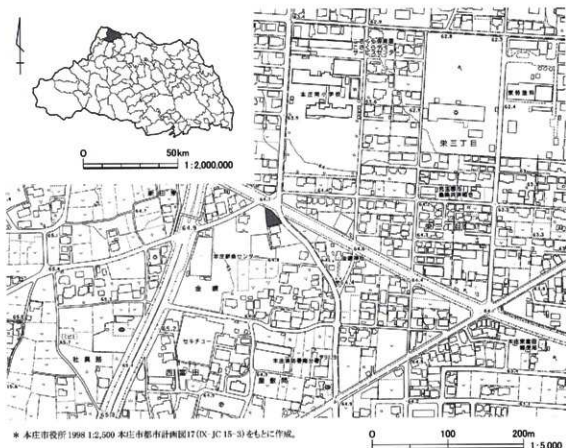


図2 遺跡の位置

古墳時代の調査などにおいて混入といった形で副次的に見つかっている。石神境遺跡、社具路遺跡、西五十子田端遺跡にてナイフ形石器、古川端遺跡で細石刃、彫器、刺片、三左山遺跡で船底形石器と尖頭器、大久保山Ⅰ遺跡にて石核、柏一丁目3番地内では尖頭器が、それぞれ採集されている。

〔縄文時代〕 将監塚、西富田前田の両遺跡で集落跡が確認されている。将監塚遺跡では、中期を中心とする多数の住居跡が検出された。

図3で示した遺跡にて、主に中期から後期にかけての遺物の散布が知られる。このうち有勝寺北裏と大久保山Aの両遺跡は、晩期を除くほとんどの時期の遺物を包蔵する遺跡として特筆されよう。

草創期の資料が比較的そろっているのも、市域の特徴である。笠ヶ谷戸遺跡、将監塚遺跡では、有舌尖頭器が単独で、また大字小島の万年寺地区からは、草創期特有の大形打製石斧が出土した。有勝寺北裏遺跡では、小片ながら爪形文土器 12 点と多縄文系土器約 20 点、および早期の押型文土器の破片 200 点弱が採集されている。

〔弥生時代〕 大久保山周辺に遺跡が比較的多く分布する。大久保山A遺跡では中期の再葬墓とおぼしき土坑1基、大久保山ⅢB遺跡で後期の住居跡2軒、同ⅣA遺跡にて同じく4軒、近接する山根遺跡でも住居跡の調査例がある。このほか、有勝寺北裏遺跡で中・後期、下野堂地区において後期の土器破片がそれぞれ見つかる。児玉郡域の当該期遺跡は、概して丘陵上や谷筋周辺に立地する傾向をもつ。本庄市内では同様の地形が少なく、その点が居住地選定に際しての制約となっていた可能性も考えられる。

〔古墳時代〕 4世紀（いわゆる五領式期）の集落遺跡は、女堀川中流域や男堀川周辺に集中する傾向を示す。一方、5世紀後半に入ると、大字西富田地区と本庄段丘崖地区を中心に、集落遺跡が急増する。

遺跡地名一覧

縄文時代遺物出土地

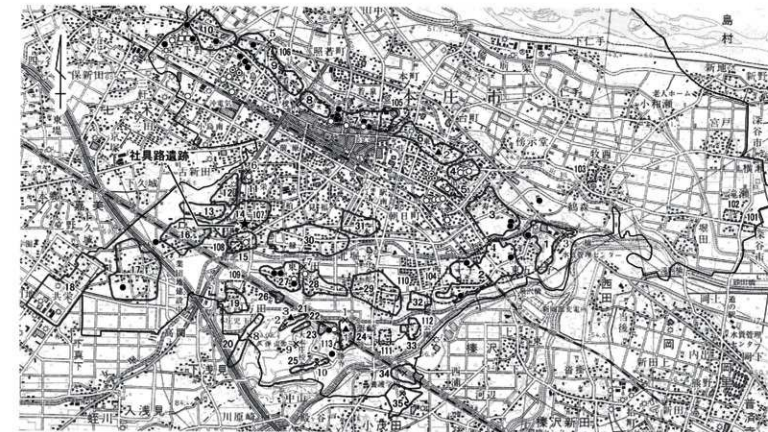
- 1 有勝寺北原遺跡 (早期～後期)
- 2 大久保山A遺跡 (早期～後期)
- 3 東五十子遺跡 (中期～後期)
- 4 諏訪新田遺跡 (中期)
- 5 小島遺跡 (中期)
- 6 二本松遺跡 (中期)
- 7 公卿塚古墳 (後期)
- 8 四方田字南山
- 9 大久保山B遺跡 (中期)
- 10 西谷遺跡 (前期)

弥生時代遺物出土地

- 1 有勝寺北原遺跡
- 2 薬師堂遺跡
- 3 大久保山A遺跡

古墳時代～古代集落

- 1 東五十子遺跡 (4～10C)
- 2 西五十子遺跡 (6C～)
- 3 諏訪新田遺跡 (4～8C)
- 4 諏訪新田遺跡 (6C～)
- 5 大塚遺跡 (6～10C)
- 6 薬師堂遺跡 (5～10C)
- 7 本町遺跡 (5C～)
- 8 北原遺跡 (6C～)
- 9 小島遺跡 (4～8C)
- 10 万年寺遺跡 (6～10C)
- 11 二本松遺跡 (5C)
- 12 夏目遺跡 (5～7C)
- 13 西富田新田遺跡 (5C)
- 14 薬師遺跡 (6～10C)
- 15 本郷遺跡 (5～7C)
- 16 東今井遺跡 (6C～)
- 17 西今井遺跡 (6C～)
- 18 北河内遺跡・古河内遺跡 (6C～)
- 19 四方田遺跡 (5C～)
- 20 山根遺跡 (5C～)
- 21 大久保山A遺跡 (5C～)
- 22 大久保山C遺跡 (6～7C)



- × 縄文時代遺物出土地 ▲ 弥生時代遺物出土地 □ 方形周溝墓 ● 古墳 (定存)
 ○ 古墳 (平議) ○ 古墳 (前期) □ 古墳時代～古代集落 〓 道路・館跡・墳墓址

0 3km
1:50,000

- | | | | | | | |
|------------------|------------------|----------------|-----------|------------|-----------|--------------|
| 23 前山遺跡 (5C～) | 29 本田遺跡 (6～8C) | 35 川原山遺跡 (5C～) | 104 五十子陣跡 | 107 富田氏館跡 | 110 北堀跡 | 113 東谷中中世墳墓址 |
| 24 有勝寺遺跡 (5～10C) | 30 伊丹堂遺跡 (6～7C) | | 105 本庄城跡 | 108 富田氏館跡 | 111 栗崎館跡 | |
| 25 西谷遺跡 (6～7C) | 31 笠ヶ谷戸遺跡 (5C～) | 城跡・館跡・墳墓址 | 106 小島氏館跡 | 109 四方田氏館跡 | 112 東本庄館跡 | |
| 26 下田遺跡 (6C～) | 32 諏訪台遺跡 (6～10C) | | 101 竜崎岸地跡 | | | |
| 27 東富田遺跡 (5C～) | 33 東本庄遺跡 (6～10C) | | 102 竜崎氏館跡 | | | |
| 28 久下塚遺跡 (5C～) | 34 古川端遺跡 (5C～) | | 103 牧西氏館跡 | | | |

* 国土地理院理 1998 1:50,000 地形図 NQ 54-30-15 (宇都宮15号) 高崎、および本庄市 1976 をもとに作成。同書付図中の掲載番号を流用している関係上、遺跡の番号が不連続となっている。

図3 本庄市内の主な遺跡

こうした動向は、首長墓としての古墳葬制の採用、初期カマドの導入、加えて須恵器模倣品や大形甕の出現が示唆する社会的な変化の影響を受け、弥生時代以来の選地が変容していく過程ととらえることができよう。

6・7世紀（いわゆる鬼高式期）には、遺跡数がさらに増加する。6世紀に属する夏目遺跡第51号住居跡のカマドからは、祭祀に用いられた可能性のある高坏や三連小壇が出土している。カマド構築時に袖へ白玉や勾玉を埋納する風習が顕著になるのはこのころである。なお、東五十子城跡内遺跡の第10号住居跡からは、玉類とともに多量の鉄製工具が出土しており、注意される。7世紀、遺跡数はひとつのピークを迎え、各遺跡における遺構の重複も顕著となる。いまい台産業団地造成に際する発掘調査では、一遺跡でじつに333軒もの住居跡が検出された。薬師元屋舗遺跡第24号住居跡では、U字状のクワ先が出土している。

方形周溝墓は、弥生時代のものが市域においてほぼ皆無なのに対し、当該期の類例が今井諏訪遺跡（4世紀）と万年寺遺跡（4・5世紀）にて多数検出されている。ただし、後者の例に関しては、一辺30m以上で低墳丘をもつものもあり、一部方墳も含まれている可能性が高い。

市内では、かつて200基以上の古墳が存在したとみられるが、今や盛土が残るものにして10基あまりを数えるにすぎない。これらのうち、八幡山古墳、蜷影山古墳、山ノ神古墳は、市指定文化財として保存されている。

児玉郡では古式古墳が多く知られ、本庄市内でも5世紀前半に築造されたとみられる事例が点在する。前山1号墳（前方後円墳）が最古とされ、木棺直葬で埴輪の用いられていない前山2号墳（方墳）がこれに次ぐ。小形埴と滑石製模倣品の出土をみる万年寺つつじ山古墳（方墳）、これに隣接する万年寺八幡山古墳も埴輪を伴わない。やや後続の公卿塚古墳は直径69mと推測される大型円墳で、格子目叩き技法の円筒埴輪と形象埴輪、滑石製模倣品が出土している。このほか、埼玉県選定重要遺跡の旭・小島古墳群は、古墳の分布数（86基）において特筆されよう。また、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群については、古式群集墳の段階から形成が始まっていることが明らかになりつつある。

〔奈良・平安時代〕 ひき続き集落遺跡が多数に上る一方で、遺構の分布密度がやや散漫となる。将監塚遺跡や本庄城址内遺跡、大久保山遺跡の調査成果より、これらが計画的に建設された村落である可能性が指摘されている。計画性といえば、条里制遺構も重要な当該期遺構として挙げられよう。律令制のもと、地域集団単位でなされた大規模土木工事の痕跡で、水路が付随する。本庄市周辺の水路は、幹となる水路から順次枝分かれし（猿尾状水路）、水路が立体的に交差する（樋越し構造）点に特徴がある。産業団地造成や土地改良事業がさかんになる以前、女堀川流域には県内有数の条里遺構が分布し、一部はごく最近まで活用されていた。

特徴的な遺物を伴う遺跡としては、文字線刻紡錘車が見つかった薬師元屋舗遺跡と田端屋敷遺跡がまず挙げられる。前者第51号住居跡出土の紡錘車には、「武蔵野国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」の線刻があり、『和名抄』高山寺本に見える草田郷の所在を数百年ぶりに立証する文字資料となった。東五十子の田端屋敷遺跡からは、県内で最多文字数の刻まれた紡錘車が発見された。このほか、天神林Ⅱ遺跡第2号住居跡では、金属製品を模倣した可能性のある三足付き鍋状土器、本庄城址内遺跡第10号住居跡の床面からは、985年初鋳の唐国通宝がそれぞれ出土している。

〔中・近世〕 律令制が崩壊しつつあった古代末、市周辺では武蔵七党のひとつである児玉党が結成された。その後、児玉党の本流と分家は、児玉郡内に多くの居館を構え、それらが（伝）四方田氏館跡、（伝）富田氏館跡、（伝）今井氏館跡、栗崎館跡、本田館跡、東本庄館跡として残っている。ただし、いずれ

についても、本格的な発掘調査はこれまで行われていない。

やや下って 15 世紀後半、関東管領上杉氏と古河公方足利氏の対立が顕在化し、武蔵・上野を領する上杉方は、拠点として五十子陣（城）を構築した。以来、1478（文明 10）年の上杉氏と古河公方との和睦になるまで、同陣周辺はおよそ 20 年にわたって、五十子の合戦に代表されるような戦乱の舞台となる。城跡という字名を現在に残す五十子陣は、久しく実態不明の史跡とされていた。しかし近年、広城園清掃センターの建設に伴い、3年にわたる発掘調査が実施され、陣の中心ではないものの、関連遺構や大量の土師器小皿、輸入陶磁器などが発見されている。

一方、大久保山寺院跡にほど近い東谷中世墓群では、未調査ながら古瀬戸や鉄軸の壺が採集されている。大久保山寺院跡は、児玉党本家である庄（荘）氏の菩提寺となる可能性があり、両遺跡の関連が注目されている。このほか、社具路遺跡第4地点では、北宋銭や和鏡が埋納された墓穴が検出されている。

五十子陣魔絶の前後より、在地の庄氏は本宗家を本庄と呼ぶようになった。これが、本庄市の名のゆえんである。本庄氏は、東本庄にあった拠点を 1556（弘治 2）年に現在の市役所付近へ移して本庄城としたが、豊臣氏による小田原攻めの際、後北条氏にくみしたかどで滅亡に追いこまれてしまう。まもなく江戸の世となり、本庄城はわずか 56 年で廃城に至る。その後の同城周辺は、むしろ中山道沿いの宿場町として、今日の本庄市発展の礎を築いていくことになる。なお、市内において近世を対象として調査が行われた例はいまだまれで、他の時代の調査中に民家遺構や近世墓、陶磁器などが副次的に検出されるのみである。

〔近代〕近世同様、対象は限定されるものの、埋蔵文化財の観点から近・現代史に光を当てる試みがいくつか行われている。市役所新庁舎建設に先がけては製糸工場跡が調査され、施設の構造による問題から明確な遺構は検出されなかったものの、ガラス瓶や養蚕関係の陶磁器が多量に出土した。日本鉄道本庄駅開業以来、近代の本庄は養蚕の町であり、製糸工場とその煙突は、町の景観の一部をなすものであった。また、神保原駅から小島万年寺を経由するトロッキ軌道跡は、烏川の砂利を採取する目的で敷設されたものであるが、この一部でも調査が行われている、さらに、戦時中の遺跡として、青葉隊の塹壕跡、排水施設と菜きょうが確認された児玉飛行場が挙げられる。

〔社具路遺跡周辺の概況〕先述のとおり、社具路遺跡では、別地点にて後期旧石器時代のナイフ形石器が採集されている。また、二本松遺跡にて縄文時代中期、^{くげつホ}公認塚古墳では同後期の遺物の散布が確認されている。とはいえ、目下のところ先史時代に関連した調査例はごく限られているのが実状である。

一方で、本遺跡周辺は、主に古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡が密集する区域として知られている。半径 1km 以内に限っても、薬師、薬師元屋舗、（西富田）本郷、（西富田）二本松、夏目、西富田新田、東今井、四方田、下田、東富田、伊丹堂の各集落遺跡が分布する。近年、周辺遺跡の調査例が増加したことから、個別の断片的な調査成果を概括し、往時の集落のありかたを復原する道がしだいに開かれつつある。現状では、旧河道や野水流路の位置などの微地形にかんがみ、5、6の集落群が相前後して存立していた旨の予察が提示されている（増田 1997）。それによると、本遺跡のうち大半の地点は、東方の薬師遺跡、薬師元屋舗とあわせていわゆる「西富田金鑽古代集落」を形成し、南部の第1地点は西富田本郷遺跡とともに「西富田本郷古代集落」として把握されるという。

なお、二本松遺跡は、関東地方における初期カマド導入の住居跡が昭和 30 年代に本格調査された事例として、学史的にも著名である。また、周辺区域はかねてより平安時代の児玉郡草田郷の一候補地と目されていたが、先述したように、薬師元屋舗遺跡の第 51 号住居跡より「武蔵野国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」と線刻された紡錘車が出土し、くだんの推測が立証されるに至った。

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

試掘調査の成果などを参考にし、遺構確認面をローム層上面と定め、その直上までは重機を用いて掘削した。その後、遺構の確認と調査は人力にて行った。掘削に先がけて、調査範囲のうち道路に面した箇所に防護柵を設置した。現地実測の基準として方眼基準杭と基準点を設置し、各種遺構図は手実測により縮尺 1/20 で作成した。遺構の写真撮影には、35mm のモノクロ、カラーネガ、リバーサルの各フィルムを使用した。遺物の取り扱いについては、接合にセメダインC、復元に石膏、写真撮影に 35mm・6×7判モノクロフィルムをそれぞれ使用した。

2 調査の経過

発掘調査は、1999（平成 11）年 8 月 23 日から同年 9 月 3 日にかけて実施された。遺構調査終了後、調査区を埋め戻して事業者側へ引き渡しを行った。整理調査は同年 9 月 3 日から 2004（平成 16）年 3 月 31 日にかけて実施し、同年 3 月 31 日付で報告書を刊行した。

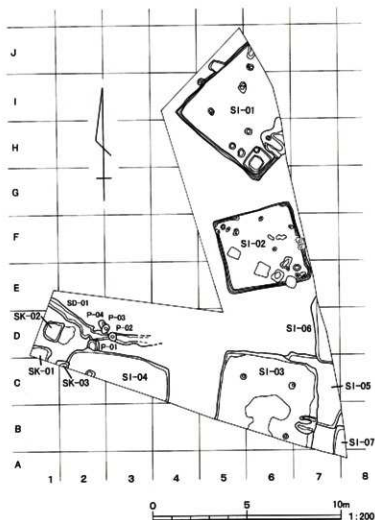


図4 遺跡全体図

IV 調査の成果

1 遺跡の概要

212 m²を対象とする調査で検出された遺構の内訳は、住居跡7軒、土坑3基、ピット4基、および溝状遺構1条である。調査面積に比べると、住居跡の分布状況は密といえる。一方、遺物としては、土師器、須恵器を中心とする遺物が、住居跡と土坑の覆土より見いだされている。

2 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

7軒が検出された。各遺構の帰属時期には、古墳時代(中)後期から平安時代前半までの時期幅がある。

S1-01 (図5・6、表1)

位置：調査区北部、主としてH・I・5・6区に位置する。東部は調査区外となり、調査された範囲は全

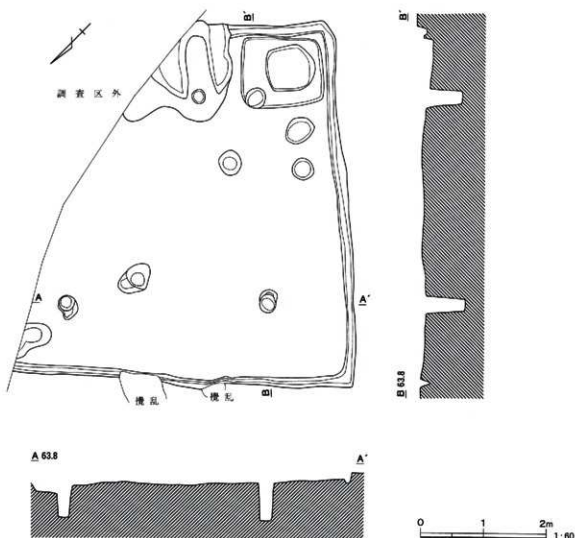


図5 S1-01

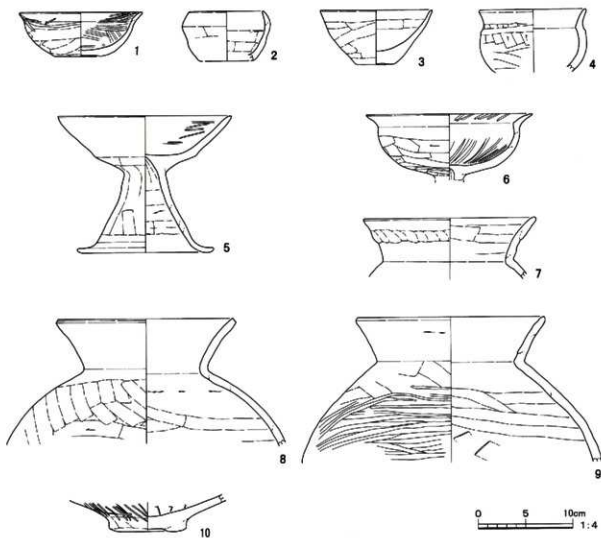


図6 S1-01 出土遺物

体の4分の3程度である。主軸方位は、S-46°-Eである。

形状：長軸 5.79m、短軸は不明。遺構確認面において、おおむね正方形を呈するものと推測される。断面は、浅い凹字形である。

構造：後世における削平などの影響を受けたためか、遺構確認面から床面までは最深部で 27cm と浅い。壁面は、70°～80°の角度で外傾して立ち上がる。

カマドは、南東部に位置する一辺のほぼ中央に設けられている。壁への切り込みはほとんど見られず、煙道も明確ではない。焚出口付近には、25cm ほどのくぼみが認められる。また、カマドの右側には貯蔵穴がある。開口部において長方形、断面は段状の凹字形を呈し、長軸 1.32m、短軸 1.11m、床面からの深さ 65cm を測る。平面が（隅丸）方形である点、規模が大きめである点は、一般に5世紀後葉から9世紀後葉までにわたって事例が認められる貯蔵穴の中では、古い部類の特徴に相應する。

柱穴に相当するピットは、向かって奥左側の1か所を除く3基が確認されている。平均にしてピットの長径は 36cm、深さは 60cm 程度を測る。奥右側の1基は、貯蔵穴の開口部と近接もしくは重複している。このほか、壁際には最深 15cm の周溝が顕著に残る。総じて、付帯施設はしっかりとつくっている感がある。

遺物：覆土より、土師器が多数出土している。図6-1、3の坏ないし「埴」は、いずれも平底である。2についても、平底を有していたものと推測される。5の高坏は、坏部下位に弱い稜があり、裾部の端は短

No.	器 種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	土 師 器 坏	口径 13.0 底径 4.7 器高 4.7	平底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反して開く。	外面－口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ヘラナデ後、上位ミガキ、底部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部－底部ナデ後ミガキ。	石英・白色粒・黒色粒 内外－明赤褐色	一部欠損。外面黒色物付着。
2	土 師 器 埴	口径 (7.7) 底径 (5.8) 器高 (5.3)	体部は彎曲し、口縁部は内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面－口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内－にぶい黄褐色 外－にぶい褐色	1/3。
3	土 師 器 埴	口径 (12.0) 底径 4.3 器高 5.8	平底。体部はやや丸みをもって立ち上がり、内彎ぎみの口縁部に至る。	外面－口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、底部ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、体部－底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内－にぶい黄褐色 外－にぶい黄褐色	2/3。
4	土 師 器 小 型 壺	口径 (11.2) 底径 ー 器高 ー	胴部上位にふくらみをもつ。口縁部は外反して開く。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、一部ヘラナデ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	雲母・黒色粒 内外－にぶい褐色	口縁部～胴部 中位一部残存。
5	土 師 器 高 坏	口径 (18.4) 底径 (14.5) 器高 14.4	外部下位に梗をもち、口縁部は外反ぎみに開く。脚部は下位にふくらみをもち、頸部は広がり、端部はやや反り上がる。	外面－口縁部ヨコナデ、坏部下位～脚部ヘラナデ、胴部ヨコナデ。内面－口縁部ヨコナデ後ミガキ、坏部ナデ後ミガキ、頸部上位ナデ、底部ヨコナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外－明赤褐色	2/3。内外 面黒色物付着。
6	土 師 器 高 坏	口径 (17.6) 底径 ー 器高 ー	坏部は彎曲して立ち上がり、口縁部は外反して開く。	外面－口縁部ヨコナデ、坏部ヘラケズリ後、上位ナデ。内面－口縁部ヨコナデ後ミガキ、坏部ナデ後ミガキ。	雲母・白色粒 内外－明赤褐色	坏部2/3残存。外面に一部黒色物付着。
7	土 師 器 壺	口径 18.3 底径 ー 器高 ー	口縁部は肥厚し、外反ぎみに開く。	外面－口縁部上端ヨコナデ、下端指押さえ、胴部上位ナデ。内面－口縁部上位ヨコナデ、中～下位ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外－明赤褐色	口縁部残存。
8	土 師 器 壺	口径 (18.6) 底径 ー 器高 ー	胴部はふくらみをもち、口縁部は外反ぎみに開く。口唇部に凹線が1条めぐる。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部上位ヘラナデ、胴部中位ヘラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外－にぶい褐色	口縁部～胴部 上位1/4残存。外面黒底。
9	土 師 器 壺	口径 (20.0) 底径 ー 器高 ー	胴部はふくらみをもち、口縁部は外反ぎみに開く。	外面－口縁部ヨコナデ、頸部ヘラナデ、胴部ヘラナデ後ミガキ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内－明赤褐色 外－にぶい赤褐色	口縁部～胴部 2/3残存。外面黒底。
10	土 師 器 壺	口径 ー 底径 8.1 器高 ー	上げ底。	外面－胴部下位ヘラナデ後ミガキ、底部ヘラケズリ。内面－底部ヘラナデ。	石英・黒色粒・褐色粒 内－暗灰黄色 外－明赤褐色	胴部下位～底部 1/3残存。

表1 S1-01 出土遺物観察表

い範囲で反り上がる。6も高坏であるが、坏部の形状や成形および整形の手法は、むしろ脚部をもたない坏のそれに類似する。7の壺は、弥生時代以来の複合口縁壺の系譜をひいているが、折り返し口縁の肥厚は微弱である。これらの土師器は、おおむね5世紀中葉に相当する特徴を示しているが、細部において退嬰化が認められ、あるいは若干時期が下るものかもしれない。

時 期： 付帯施設の特徴、および出土遺物の内容から、5世紀中葉から後葉にかけて構築ないし廃絶された住居と考えられる。

S1-02 (図7～9、表2)

位 置： 調査区の中央付近、主としてE・F・5・6区に位置する。今回の調査では唯一、ほぼ全体が調査された住居跡である。主軸方位は、N-77°-Eである。中央部から南部（右側）にかけて、長径60cm前後の擾乱が3か所認められる。

形 状： 長軸4.44m、短軸は4.20mを測り、遺構確認面において、おおむね正方形を呈するものと推測される。断面は、浅い凹字形である。

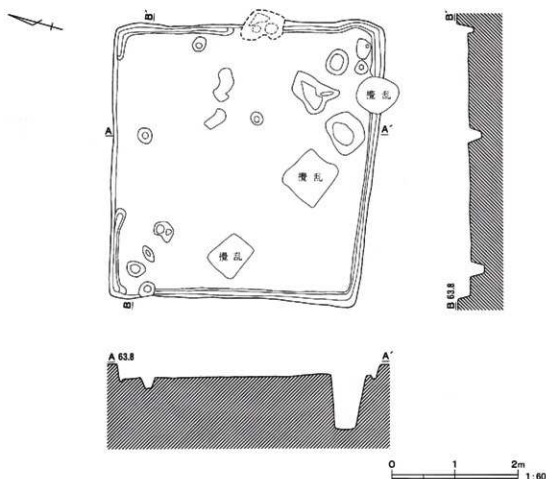


図7 SI-02

構造： 遺構確認面から床面までは、最深部にして22cmと浅い。壁面は、80°前後の角度で外傾して立ち上がる。

カマドの痕跡は、住居跡東辺中央の幅69cm、奥行き48cmほどの範囲で確認された。壁への切り込み、住居本体のプランからカマドがはみ出す範囲が、20cmあまりの程度で認められる。ただし、残存状態に難があり、形状、規模、および構造については詳細不明である。

床面で検出された土坑・ピットの配置には明瞭な規則性が認められず、順当に柱穴あるいは貯蔵穴らしき位置を占めるものは見当たらない。図7のセクションポイントA'付近に位置する土坑は、長径72cm、深さ89cmを測る。位置が典型例と異なり、また深さに関しても平均を大きく上回るが、一応貯蔵穴の可能性もあるものとしてとらえておきたい。このほか、壁際には最深10cmの周溝が、住居跡北辺を除く箇所を確認されている。

遺物： 覆土より、土師器が多数出土している。図8-1・2は、やや外反して立ち上がる形状の環。7～12の長胴甕は、胴部中位が最大径となる。これらは、6世紀前葉の所産である。14の鉢形の甕も、ほぼ同時期とみられる。一方、4の高坏は坏部下位に稜をもつもので、ややさかのぼって5世紀後葉に属するかもしれない。これと近い時期のものに、15・16の壺がある。また、13は他の長胴甕と異なり口縁部に最大径をもっており、後出的な様相を帯びている。17・18は粘土塊。18には、黒色物の付着が認められる。19は、側面の摩痕が顕著な礫。輝石安山岩製である。

時期： 出土遺物の内容から、6世紀前葉に廃絶された住居と考えられる。

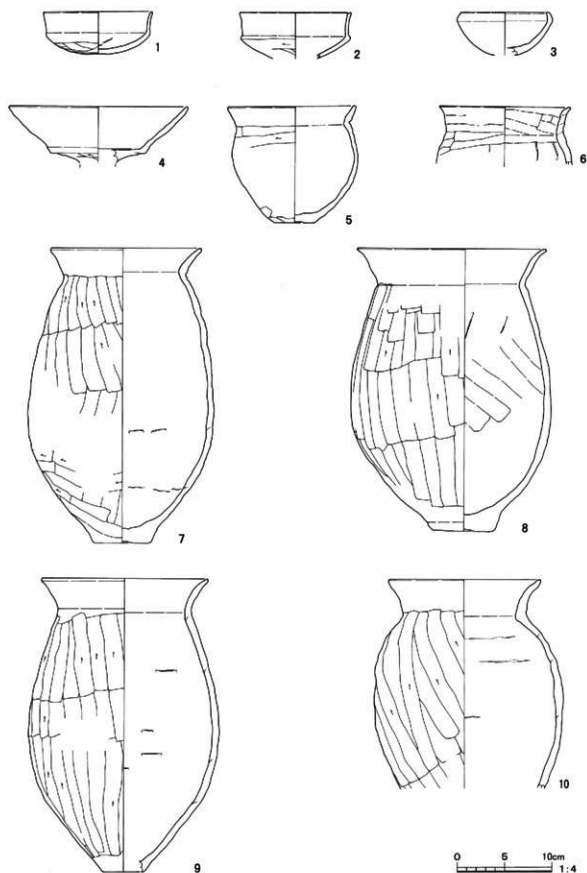


図6 S1-02 出土遺物 (1)

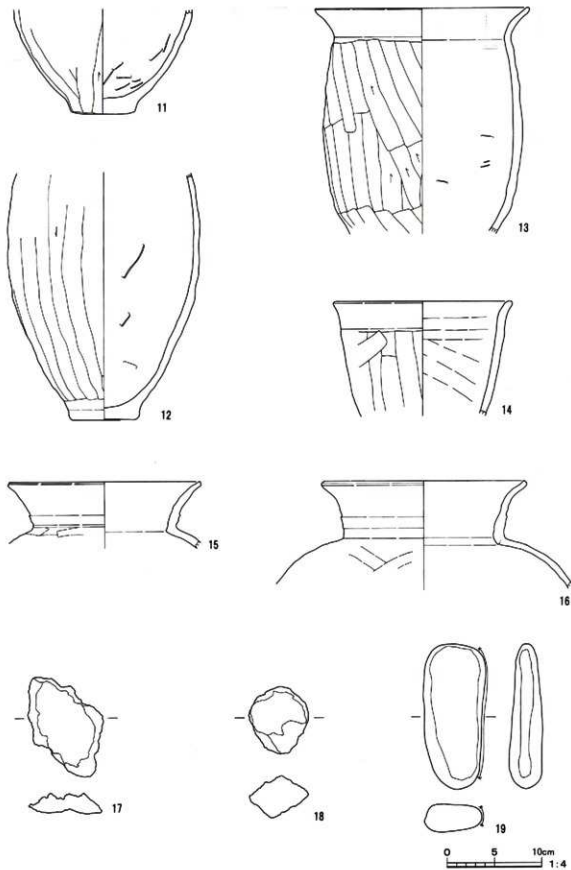


圖6 SI-02 出土遺物 (2)

No.	器 種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	土 師 器 杯	口径 11.3 底径 — 器高 4.5	丸底。体部は口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反ぎみに立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後、上位ナデ、底部ヘラケズリ。内面—口縁部へ体部ヨコナデ、底部ナデ。	チャート・黒色粒 内外—明赤褐色	ほぼ光沢。
2	土 師 器 杯	口径 (11.6) 底径 — 器高 —	体部は口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立ぎみに立ちあがり、端部でわずかに外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面—口縁部へ体部上位ヨコナデ、体部下位ナデ。	雲母・黒色粒 内外—明赤褐色	1/3。
3	土 師 器 碗	口径 (9.2) 底径 — 器高 —	体部はふくらみをもって立ち上がり、口縁部は内彎する。	外面—器面荒れており不明瞭。内面—器面荒れており不明瞭。	黒色粒・粗砂粒 内—ぶい黄褐色 外—ぶい褐色	2/3。
4	土 師 器 高 杯	口径 (18.6) 底径 — 器高 —	杯部下位に稜をもち、口縁部は内彎ぎみに開く。	外面—口縁部ヨコナデ、杯部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、杯底部器面荒れており不明瞭。	石英・黒色粒 内—赤褐色 外—明赤褐色	杯部 1/3 残存。
5	土 師 器 小 型 壺	口径 13.4 底径 4.1 器高 12.4	上げ底。胴部は中位にふくらみをもち、口縁部は短く外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部へ底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部へ底部ナデ。	石英・黒色粒 内—ぶい褐色 外—褐色	3/4。内外面黒斑。
6	土 師 器 小 型 壺	口径 (13.7) 底径 — 器高 —	胴部はゆるやかなふくらみをもち、口縁部は外反ぎみに開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ヘラケズリ。内面—口縁部へ胴部上位ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内—ぶい黄褐色 外—ぶい褐色	口縁部へ胴部上位 1/3 残存。
7	土 師 器 壺	口径 (15.8) 底径 5.9 器高 31.2	平底。胴部は下位にふくらみをもつ。口縁部は外反ぎみに開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ナデ。	チャート・黒色粒 内外—ぶい黄褐色	一部欠損。
8	土 師 器 壺	口径 (20.2) 底径 6.5 器高 30.0	上げ底。胴部は下位にふくらみをもつ。口縁部は外反ぎみに開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部へ底部ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内外—ぶい黄褐色	2/3。
9	土 師 器 壺	口径 (17.6) 底径 (4.6) 器高 31.0	胴部は中位にふくらみをもつ。口縁部は外反ぎみに開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内—褐色 外—ぶい褐色	2/3。
10	土 師 器 壺	口径 (15.8) 底径 — 器高 —	胴部は上位にわずかなふくらみをもつ。口縁部は外反して開き、端部はわずかに内彎する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	黒色粒・白色粒 内外—ぶい赤褐色	口縁部へ胴部 2/3 残存。外面黒斑。
11	土 師 器 壺	口径 — 底径 6.6 器高 —	平底。胴部は上方に向かってふくらみをもつ。	外面—胴部下位へ底部ヘラケズリ。内面—胴部下位へ底部ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内—ぶい黄色 外—ぶい褐色	胴部下位へ底部残存。
12	土 師 器 壺	口径 — 底径 6.8 器高 —	平底。胴部は中位にわずかなふくらみをもつ。	外面—胴部ヘラケズリ後、一部ナデ、底面ヘラケズリ。内面—胴部へ底部ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内外—褐色	胴部中位へ底部 2/3 残存。外面黒斑。
13	土 師 器 壺	口径 (22.4) 底径 — 器高 —	胴部は中位にわずかなふくらみをもつ。口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	石英・黒色粒 内—明赤褐色 外—褐色	口縁部へ胴部 2/3 残存。
14	土 師 器 瓶	口径 (18.5) 底径 — 器高 —	胴部はふくらみをもたない。口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内—明赤褐色 外—明褐色	口縁部へ胴部上位一部残存。
15	土 師 器 壺	口径 20.1 底径 — 器高 —	口縁部は下位に段差をもち、外反して開く。端部は平坦で、凹線がめぐり、口縁部は外反して立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ。	雲母・白色粒 内外—褐色	口縁部残存。口縁部内面に煤付着。
16	土 師 器 壺	口径 (21.2) 底径 — 器高 —	胴部は大きくふくらむ。口縁部は下位に段差をもち、外反して開く。端部は平坦で凹線がめぐり、口縁部は外反して立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ。	石英・黒色粒 内—明赤褐色 外—褐色	口縁部へ胴部上位 1/4 残存。
No.	種 類	法 量 (cm・g)			備 考	
17	粘土 塊	長さ: 10.7 幅: 8.1 厚さ: 2.0 重さ: 127.15	チャート・黒色粒 褐色			
18	粘土 塊	長さ: 7.2 幅: 6.4 厚さ: 4.5 重さ: 74.75	チャート・黒色粒 ぶい黄褐色			黒色物付着。
19	礫	長さ: 15.4 幅: 6.6 厚さ: 2.9 重さ: 489.96	輝石安山岩			全面平滑。側面の摩痕顕著。

表2 S1-02 出土遺物観察表

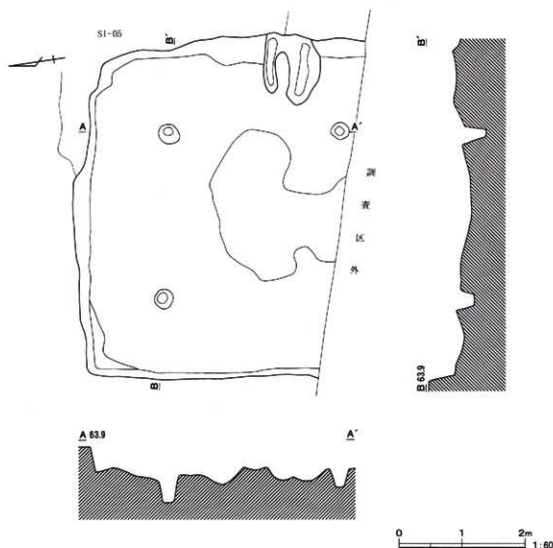


図 10 S1-03

S1-03 (図 10-11、表3)

位置： 調査区南部、主としてB・C-5・6区に位置する。後出のS1-05に切られているが、堅穴の掘りこみが比較的深いため、平面形などの把握が可能な状態であった。また、遺構南部、全体のおよそ4分の1が調査区外となる。主軸方位は、S-80°-Eである。

形状： 長軸5.52mを測り、短軸は不明。遺構確認面において、おおむね正方形を呈するものと推測される。断面は、浅い凹字形である。

構造： 現地調査時の諸事情により、本住居跡に関しては、掘り方レベルでの所見を記す。遺構確認面から掘り方底面までは、最深部にして40cmを測る。壁面は、80°前後の角度で外傾して立ち上がる。底面では、大小の凹凸が認められる。

住居跡東辺中央にて、カマドが確認された。幅90cm、奥行き1.11mを測り、壁への切り込みはほとんど認められない。柱穴に相当するビットは、3基検出された。平均にして長径32cm、深さは33cmとなる。貯蔵穴ともうひとつの柱穴は、調査区外に存在する可能性が高い。掘り方底面の中央付近は、ゆるやかにくぼんでいる。なお、周溝は確認されなかった。

遺物： 覆土より、主として土師器及び須恵器の破片が出土している。図11-2は、やや外反して開く形

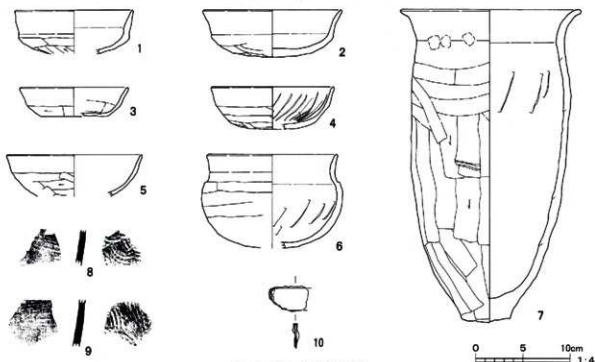


図 11 SI-03 出土遺物

No.	器 種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	土 師 器 鉢	口径 (12.4) 底径 — 器高 —	体部は浅く、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はわずかに内彎して開き、内面に稜をもつ。	外面→口縁部ヨコナデ、体部→底部ヘラケズリ。内面→口縁部→体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内→褐色 外→にぶい褐色	1/3。
2	土 師 器 鉢	口径 14.6 底径 — 器高 5.0	丸底。口縁部は体部との境に稜をもち、外反して開く。	外面→口縁部ヨコナデ、体部→底部ヘラケズリ。内面→口縁部→体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内→褐色 外→にぶい褐色	ほぼ完形。
3	土 師 器 鉢	口径 (11.4) 底径 (7.1) 器高 3.1	平底。口縁部は体部との境にわずかな稜をもち、やや外反して開く。	外面→口縁部ヨコナデ、体部→底部ヘラケズリ。内面→口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内→褐色 外→にぶい褐色	1/4。
4	土 師 器 鉢	口径 (12.8) 底径 — 器高 (4.5)	口縁部は体部との境にわずかな稜をもち、わずかに外反して開く。	外面→口縁部ヨコナデ、体部→底部ヘラケズリ。内面→口縁部→体部ナデ後、暗文状ヘラミガキ、底部ナデ。	黒色粒・粗砂粒 内→にぶい褐色 外→にぶい褐色	1/3。
5	土 師 器 鉢	口径 (14.2) 底径 — 器高 —	体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部はわずかに外反して開く。	外面→口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面→口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	チャート・黒色粒 内→にぶい褐色 外→にぶい褐色	1/4。
6	土 師 器 碗	口径 (13.6) 底径 — 器高 —	体部はふくらみをもって立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反ぎみに開き、ヨコナデにより、中位に低い稜をもつ。	外面→口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面→口縁部→体部上位ヨコナデ、体部下位ヘラナデ。	石英・褐色粒 内→褐色 外→にぶい褐色	1/6。
7	土 師 器 甕	口径 18.8 底径 5.2 器高 33.2	丸みを帯びた平底。胴部はふくらみをもたず、直胴状に立ち上がる。口縁部は外反して開く。	外面→口縁部ヨコナデ、頸部指頭庄銀、胴部上位ヘラナデ、胴部中位→底部ヘラケズリ。内面→口縁部ヨコナデ、胴部→底部ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内→明赤褐色 外→明赤褐色	ほぼ完形。
8	須 恵 器 甕	口径 — 底径 — 器高 —		外面→平行タキ後ナデ。内面→同心円文。	チャート・褐色粒 内→褐色 外→灰色	胴部破片。
9	須 恵 器 甕	口径 — 底径 — 器高 —		外面→平行タキ後ナデ。内面→同心円文。	チャート・褐色粒 内→褐色 外→灰色	胴部破片。
No.	種 類	法 量 (cm・g)			備 考	
10	(鎌)	鉄製 残長: 4.3 幅: 2.5 厚さ: 0.2 残重: 7.82			万部のみ残存。	

表3 SI-03 出土遺物観察表

状の坏。7の長胴甕は、口縁部にて最大径となる。カマドの袖に使用されたものである。これらは、6世紀後葉～7世紀初頭の所産である。10は鉄製品の破片。刃部のみを残す鎌とみられる。なお、3～5は、重複するSI-05に本来帰属するものと考えられる。

時期：出土遺物の内容から、6世紀後葉～7世紀初頭に構築ないし廃絶された住居と考えられる。

SI-04 (図 12・13、表4)

位置：調査区西部、主としてC-2・3区。調査の対象となったのは北側の一部に限られ、その他は調査区外に位置する。推定主軸方位は、S-79°-Eである。西端において、SK-03が重複する。

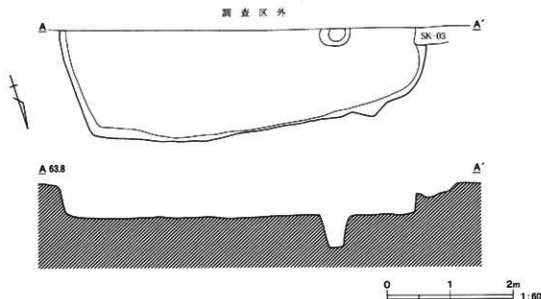


図 12 SI-04

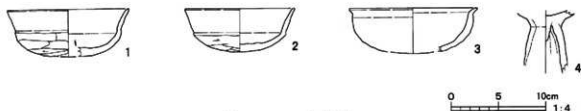


図 13 SI-04 出土遺物

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (12.8) 底径 — 器高 (3.9)	丸底。口縁部は体部との境にわずかな稜をもち、やや外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラナデ。	白色粒・褐色粒 内外—褐色	1/2。
2	土師器 坏	口径 (11.4) 底径 — 器高 4.5	丸底。口縁部は体部との境に稜をもち、やや外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラナデ。	白色粒・褐色粒 内外—褐色	2/3。
3	土師器 坏	口径 (13.3) 底径 — 器高 (4.7)	丸底。内斜口縁。体部は内彎して立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部へ底部ヘラナデ。	白色粒・褐色粒 内外—明赤褐色	1/5。
4	土師器 高坏	口径 — 底径 — 器高 —	脚部はわずかにふくらむ。	外面—脚部ヘラナデ。内面—一環底部器面荒れており不明瞭。脚部上位絞り目。	白色粒・褐色粒 内外—明赤褐色	脚部 1/4 残存。

表4 SI-04 出土遺物観察表

形状： 推定東西軸約 5.60m、南北軸は不明。遺構確認面において正方形、あるいは隅丸正方形を呈するものと推測される。断面は、浅い凹字形である。

構造： 遺構確認面から床面までは、最深 51cm を測る。壁面は、80° 前後の角度で外傾して立ち上がる。

調査範囲において、カマド、貯蔵穴、周溝といった付帯施設は確認されていない。唯一、西部において柱穴とおぼしき長径 51cm、深さ 52cm のピットが認められる。

遺物： 覆土より、土師器の破片が出土している。図 13-1・2 は、外反して開く形状の環。6 世紀後葉～7 世紀初頭の所産である。3 は内斜口縁の環。4 の高坏脚部は中空で、かつ長脚の頸部に含まれる。これら 3・4 は、1・2 に比べやや古い特徴を示しており、5 世紀後葉に属する可能性がある。

時期： 出土遺物の内容から、6 世紀後葉～7 世紀初頭に構築ないし廃絶された住居と考えられる。

SI-05 (図 14・15、表 5)

位置： 調査区南部、主として B・C・7 区。遺構の東部は、調査区外に位置する。推定主軸方位は、S-76°-E である。なお、本遺構を含む 3 軒の住居跡が切り合っているが、その新旧関係は、古い順に SI-03 → SI-05 → SI-06 と整理される。

形状： 推定短軸約 3.39m、長軸は不明である。遺構確認面において正方形、あるいは隅丸正方形を呈するものと推測される。断面は、浅い凹字形である。

構造： 現地調査時の諸事情により、本住居跡に関しては、掘り方レベルでの所見を記す。遺構確認面から掘り方底面までは、最深部にして 51cm を測る。壁面は、50° 前後の角度でゆるやかに外傾しながら立ち上がる。底面では、大小の凹凸が認められる。重複する SI-03 の覆土が本住居跡の一部をなしていたとみられるが、その堆積土は硬度に乏しく、本住居跡の形状をほとんど残していなかった。なお、調査範囲において、カマド、貯蔵穴、柱穴、および周溝といった付帯施設は確認されていない。

遺物： 覆土より、主として土師器と須恵器が出土している。図 15-3～5 の土師器甕は、口縁部から頸部にかけて断面コの字状に屈曲する傾向を示している。おおむね 9 世紀前葉～中葉の所産と考えられる。7 は

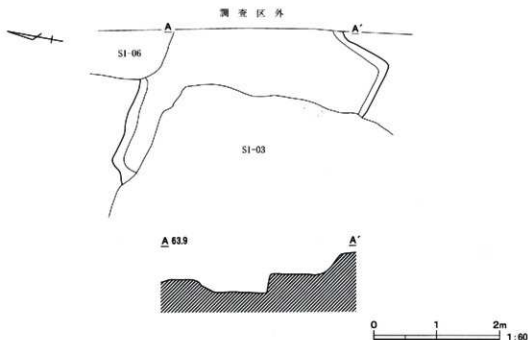


図 14 SI-05

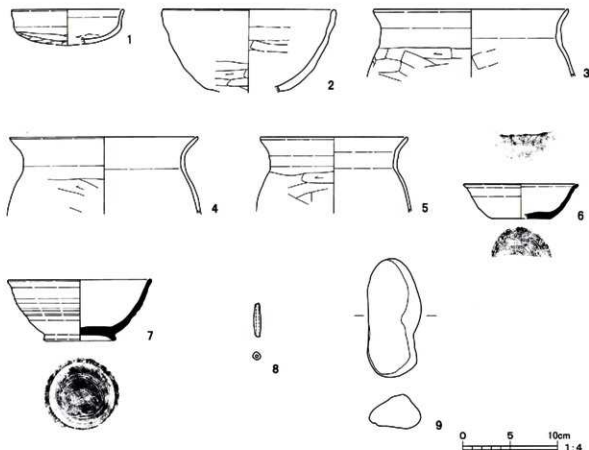


図 15 S1-05 出土遺物

No.	器 種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	土 師 器 鉢	口径 (10.1) 底径 — 器高 (3.8)	丸底。口縁部は外反ぎみに立ち上がり、端部がわずかに内彎する。	外面→口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、体部下位→底部ヘラケズリ。内面→口縁部ヨコナデ、体部→底部ヘラナデ。	黒色粒・粗砂粒 内外一にぶい 褐色	1 / 3。
2	土 師 器 鉢	口径 (18.2) 底径 — 器高 —	体部はわずかなふくらみを持ち、口縁部は内彎ぎみに直立する。	外面→口縁部ヨコナデ、体部上位ナデ、体部中位ヘラケズリ。内面→口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	石英・黒色粒 内外一にぶい 褐色	口縁部→体部一部残存。
3	土 師 器 鉢	口径 (20.5) 底径 — 器高 —	口縁部はコの字状に近く、外反して開く。	外面→口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面→口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	石英・黒色粒 内→明赤褐色 外→褐色	口縁部→胴部上位 2 / 3 残存。
4	土 師 器 鉢	口径 (19.8) 底径 — 器高 —	口縁部は外反して開き、端部でやや内彎する。	外面→口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面→口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一褐色	口縁部→胴部上位 1 / 4 残存。
5	土 師 器 鉢	口径 (15.4) 底径 — 器高 —	口縁部はコの字状に近く、外反して開く。口縁部中位にヨコナデによる段をもつ。	外面→口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面→口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	チャート・黒色粒 内→明赤褐色 外→褐色	口縁部→胴部上位 1 / 3 残存。
6	須 恵 器 鉢	口径 (11.9) 底径 (6.1) 器高 3.6	体部はわずかに丸みをもって立ち上がり、口縁端部は外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り無調整。見込糸切り痕。	白色粒・黒色粒 内→黄褐色 外→灰黄色	1 / 3。
7	須 恵 器 鉢	口径 14.9 底径 7.4 器高 6.5	体部は彎曲ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや外反する。高台部は角状でやや開く。	ロクロ整形。底部回転糸切り、高台貼り付け時周辺部ナデ。	チャート・黒色粒 内→ぶい黄色 外→浅黄色	一部欠損。
No.	種 類	法 量 (cm・g)				備 考
8	土 師 鉢	長さ: 3.7 幅: 0.8 口径: 0.3 重さ: 1.55	白色粒 褐色			完形。
9	蔦 石 器 鉢	長さ: 12.6 幅: 5.5 厚さ: 3.6 重さ: 387.06	ひん岩製			

表5 S1-05 出土遺物観察表

完形の管状土鍾、8はひん岩製の磨礪石である。

時期：出土遺物の内容から、9世紀前葉～中葉に構築ないし廃絶された住居と考えられる。古い住居跡に比べ、若干規模が小さい点を指摘することができる。

SI-06 (図16・17、表6)

位置：調査区中央部やや南東寄り、主としてD-7区に位置する。SI-05と重複し、これを切っている。住居跡西辺の付近が調査されたのみで、ほとんどの範囲が調査区外となっている。主軸方位は不明である。

形状：長軸、短軸とも規模は不明。調査範囲において最大長3.69mを測る。遺構確認面において、正方形ないし隅丸正方形を呈するものと推測される。断面は、おおむね浅い凹字形である。

構造：調査時の諸事情により、本住居跡に関しては、掘り方レベルでの所見を記す。遺構確認面から掘り方底面までは、最深部にして57cmを測る。壁面は、70～80°の角度で外傾して立ち上がる。調査範囲において、カマド、貯蔵穴、柱穴、および周溝といった付帯施設は確認されていない。

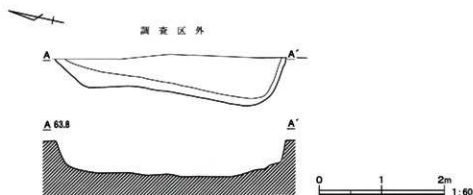


図16 SI-06

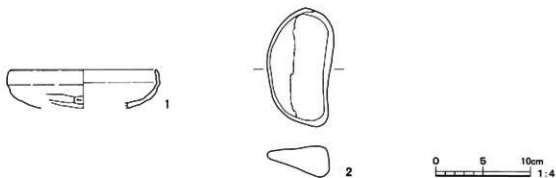


図17 SI-06出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器	口径 (15.4) 底径 — 器高 —	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は内彎する。	外面→口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面→口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	角閃石・白色粒 内外一橙色	1/5。
No.	種類	法量 (cm・g)				備考
2	礫	長さ: 12.6	幅: 7.1	厚さ: 3.2	重さ: 375.88	輝石安山岩製 全面に摩痕あり。

表6 SI-06 出土遺物観察表

遺物： 覆土より、土師器の破片などが少量出土している。図 17-1 は、丸みをもって立ち上がる形状の土師器坏。9 世紀前葉～中葉の所産とみられる。2 は、全面にわたり摩痕を有する礫で、用途については詳細不明である。輝石安山岩製。

時期： 確然としないが、9 世紀前葉～中葉に属するものか。

SI-07 (図 18-19、表 7)

位置： 調査区南端、A・B-7・8 区に位置する。住居跡の北西部が調査されたのみで、ほとんどの範囲が調査区外となっている。主軸方位は不明である。

形状： 長軸、短軸とも規模は不明。遺構確認面において、正方形ないし隅丸正方形を呈するものと推測される。断面は、浅い凹字形である。

構造： 調査時の諸事情により、本住居跡に関しては、掘り方レベルでの所見を記す。遺構確認面から掘り方底面までは、最深部にして 63cm を測る。壁面は、80° 前後の角度で外傾して立ち上がる。調査範囲において、カマド、貯蔵穴、柱穴、および周溝といった付帯施設は確認されていない。

遺物： 覆土より、土師器の破片などが少量出土している。図 19-1 は、土師器盤状坏である。8 世紀前葉の産とみられる。

時期： 確然としないが、8 世紀前葉に属するものか。

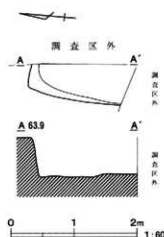


図 18 SI-07

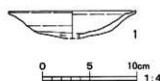


図 19 SI-07 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 盤状坏	口径 (13.4) 底径 () 器高 (2.9)	ゆるやかな丸みをもった体部から、口径部は外反して開く。	外面→口径部ヨコナゲ、体部ヘラケズリ。内面→口径部ヨコナゲ、体部ヘラナゲ。	白色粒・黒色粒 内外→褐色	1/6。

表 7 SI-07 出土遺物観察表

(2) 土坑 (図 20)

今回の調査では、堅穴住居跡とは明らかに時期の異なる土坑が 3 基検出された。いずれも調査区西部に互いに近接して位置するほか、形状や規模が似通っており、そのうち 1 基の覆土からは銭貨が出土している。以上の点から、これらの土坑は中世の土壇（墓穴）である可能性が考えられる。

SK-01 (図 21、表 8)

位置： 調査区西部に位置する。遺構の南部および西部が調査区外となる。

形状： 残存範囲における最大長は、1.14m を測る。遺構確認面において、隅丸長方形を呈するものと推測される。断面は、凹字形である。

構造： 遺構確認面から底面までは最深部で 58cm を測る。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。また、壁面および底面に明瞭な工具痕は認められない。

遺物： 覆土から、図 21-1 の北宋銭が出土した。1064 年初鑄の治平元宝である。

時期： 詳細不明ながら、中世に属する可能性がある。

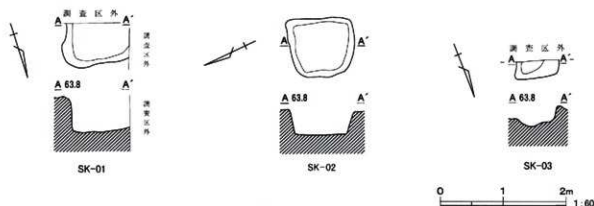


図 20 SK-01 ~ 03



図 21 SK-01 出土遺物

SK-02

位置：調査区西部に位置する。

形状：長径 1.05m、短径 94cm を測る。遺構確認面において隅丸台形、断面は凹字形を呈する。

構造：遺構確認面から底面までは最深部で 40cm を測る。壁面は、80° 前後の角度で外傾して立ち上がる。また、壁面および底面に明瞭な工具痕は認められない。

No.	種類	法 量 (cm・g)	備 考
1	古 銭	銅銭 外径: 2.3 孔径: 0.6 厚さ: 0.11 重さ: 3.37	治平元宝 初鑄年 1064 年

表 8 SK-01 出土遺物観察表

遺物：出土していない。

時期：詳細不明ながら、中世に属する可能性がある。

SK-03

位置：調査区西部に位置する。遺構の南部が調査区外となる。

形状：残存範囲における最大長は、75cm を測る。遺構確認面において、おおむね隅丸長方形を呈するものと推測される。断面は、不整形である。

構造：遺構確認面から底面までは最深部で 27cm を測る。壁面は、80° 前後の角度で外傾して立ち上がる。また、壁面および底面に明瞭な工具痕は認められない。

遺物：出土していない。

時期：詳細不明ながら、中世に属する可能性がある。

(2) その他の遺構 (表 9)

ビット 4 基と溝状遺構 1 条が検出されている。いずれも、配置に明瞭な規則性が認められないうえに遺物も伴わず、性質・用途、帰属時期が不明なものである。これらについては、表 9 にて形状、計測値などの摘要をまとめて掲載するにとどめ、個別の図示および記述は行わないこととする。

遺構名	位置	平面形	断面形	規模 (m)			備 考
				長 径	短 径	深 さ	
P-01	D-2	隅丸長方形	両字形	(0.56)	0.60	0.21	SI-04を切る
P-02	D-3	円 形	U字形	0.50	0.40	—	SD-01を切る
P-03	D-2・3	円 形	U字形	0.57	0.38	—	SD-01、P-04を切る
P-04	D-2	円 形	U字形	(0.34)	0.34	—	
SD-01	D・E-1・3	—	両字形	—	0.52	0.20	残存長 6.6m、左の計測値は最大値

表9 その他の遺構観察表

V ま と め

今回の調査は、これまで複数地点にわたって行われてきた社具路遺跡のうち、第4・第6地点に隣接し、また薬師元屋敷遺跡とも接する212 m²を対象に行われた。その結果、堅穴住居跡7軒、土坑3基、ピット4基、溝状遺構1条、および土師器を中心とする遺物多数の検出をみた。

堅穴住居跡の帰属時期は多岐にわたり、初期カマドが設けられる5世紀後半代（SI-01）から、9世紀前半代（SI-05・06）までが認められる。この時期幅は、周辺区域の調査成果とおおむね軌を一にする。一方、土坑3基については、伴出遺物がSK-01の銭貨1点にとどまるものの、中世の土坑（墓穴）となる可能性を指摘しておきたい。今回調査地点の南西に隣接する社具路遺跡第4地点においては、20基からなる中・近世土坑群が検出されており、上述の3基は、位置的に同土坑群の一部として把握しうからである。

本調査の成果自体は決して卓抜したものではないが、上述のとおり、既往の調査成果の集積と対照させることにより、大規模かつ稠密な古墳時代後期～奈良・平安時代の集落跡、あるいは郷墓とも目される中・近世墓の実態を物語る一助として、その確かな意義を発揮する。本編の末尾に、今回調査分を追加した社具路遺跡、および薬師元屋敷遺跡の遺構分布状況を図示しておく（図22）。同図は、本来単一の集落を形成していたとみられる2遺跡の中間区域について、今回新たな知見が加わった消息を伝えている。大規模集落を一度で調査する機会はまれであり、むしろ本遺跡のように複数回の調査を逐次総括しつつ集落像を更新する地道な作業がひろく求められているともいえるであろう。本遺跡周辺地域における調査事例のさらなる集積をまち、結語としたい。

主要参考文献

- 本庄市 1976 『本庄市史 資料編』
 谷 旬 1982 「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター紀要』7（財）千葉県文化財センター
 本庄市教育委員会 1983 『埼玉県本庄市 二本松遺跡発掘調査報告書』
 坂本和俊 1984 『埼玉県』『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
 本庄市教育委員会 1985 『埼玉県本庄市 夏目遺跡発掘調査報告書』
 本庄市 1986 『本庄市史 通史編Ⅰ』
 井上尚明 1986 『埴輪塚・古井戸 古墳・歴史時代編』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 本庄市教育委員会 1987 『埼玉県本庄市 東富田遺跡群発掘調査報告書』
 赤熊浩一 1988 『埴輪塚・古井戸 歴史時代編』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 本庄市教育委員会 1997 『市内遺跡発掘調査報告書～西富田地区編～』
 古代生産史研究会ほか 1997 『東国の須恵器―関東地方における歴史時代須恵器の系譜―』
 高橋泰子 1999 「貯蔵穴の研究―武蔵野国豊島郡内の電付き堅穴住居跡にみられる貯蔵穴の分析について―」『土壘』第3号 考古学を楽しむ会

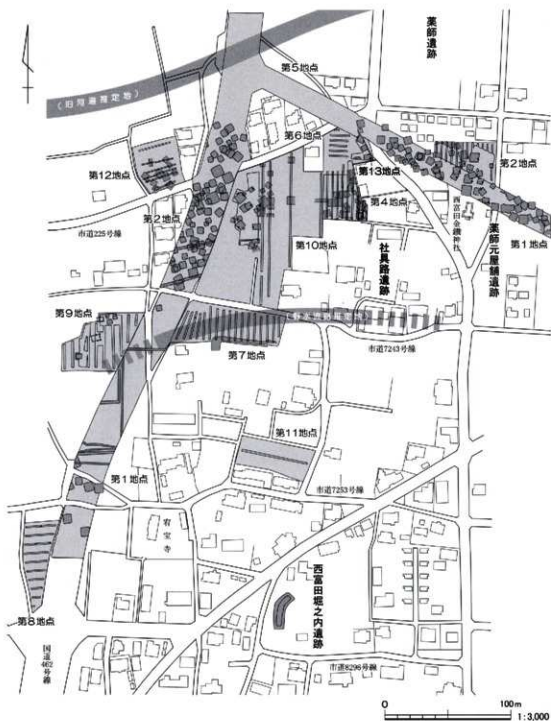
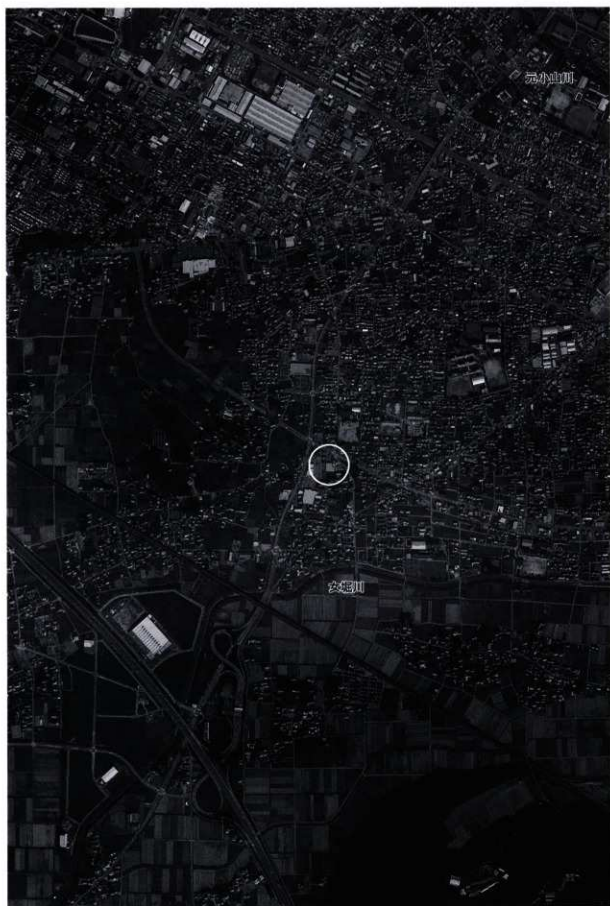


図22 西富田金鑛地区の遺構分布状況

写 真 图 版



遺跡の位置および周辺の地形



SI-01・02



SI-02 遺物出土状況



SI-03・05・06・07



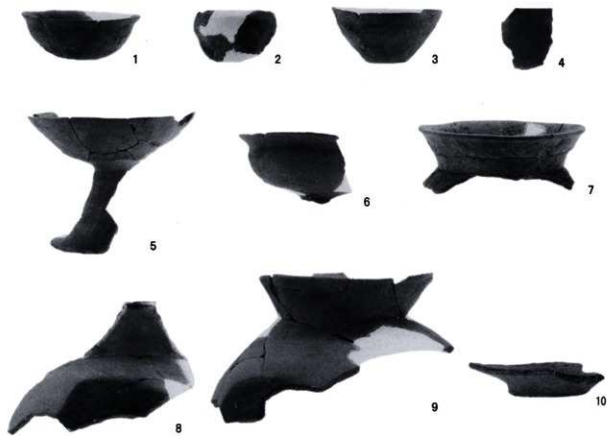
SI-03 カマド周辺



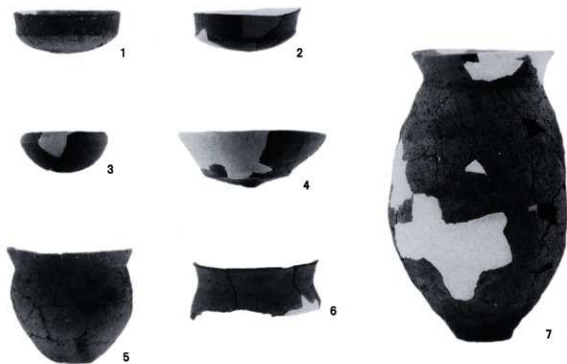
調査区南西部
遺構完掘状況



調査区南西部
遺構完掘状況(拡大)



SI-01 出土遺物



SI-02 出土遺物 (1)





14



15



16



17



18



19

SI-02 出土遺物 (3)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

SI-03 出土遺物



SI-04 出土遺物



SI-05 出土遺物



SI-06 出土遺物



SI-07 出土遺物



SK-01 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しゃくじいせきだいじゅうさんちてん							
書 名	社具路遺跡 ― 第13地点 ―							
副 書 名	民間駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	和久裕昭 有山 怪世							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所 在 地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会内 TEL 0495-25-1186							
発行年月日	西暦 2004(平成16)年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゃくじいせき 社具路遺跡 だいじゅうさんちてん 第13地点	さいたまけんほんじょうし 埼玉県本庄市 おおあざにしとみだるが 大字西富田字 かなさろ 金鎖408番1	53	093	36°13'50" 36°13'38"	139°10'11" (東経部-世界測地系) 139°10'22" (旧経部-日本測地系)	1999.08.23 ~ 2004.03.31	212㎡	民間駐車場建設
所収遺跡	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
社具路遺跡 第13地点	集落跡 墓 地	古墳時代後期 ～中・近世		竪穴住居跡7軒、土壇 (墓穴)3基、ピット4基、 溝状遺構1条		土師器、須恵器、 銭貨		

本庄市遺跡調査会報告 第10集

社 興 路 遺 跡
—第13地点—

民間駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年3月25日 印刷

平成16年3月31日 発行

発行／本 庄 市 遺 跡 調 査 会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

本庄市教育委員会内

電話 0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社

